曹操政権と豪族

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2009-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 敏一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4060

曹操政権と豪族

堀　　敏一

目　　次

1　問題の所在 ……（3）
2　曹操の仕官 ……（5）
3　曹操政権と土豪勢力 ……（7）
4　曹操政権と大姓・名士 ……（9）
5　人才主義と名士社会 ……（12）
6　寒門・単家の運命 ……（15）
註 ……（17）

— *Abstract* —

The Cao Cao Regime and Powerfull Families

Toshikazu HORI

As to the historical meaning and characters of the Cao Cao regime from the end of the 2nd century to the beginning of the 3rd century, one of the Three Kingdoms, we have had many controversies and monographs in Japan and China. But the writer can not be satisfied by the results of those studies, because they could not clarify what part the Cao Cao government played in the making process of the aristocracy of Weijinnanbeichao period.

The aristocrats of Weijiinnanbeichao grew from the great families and landowners, gained powers in Han period. At the end of the Later Han, large number of the great families resisted to the Han government controled by eunuchs. Therefore the Cao Cao's new government must restore the relation with the great families.

However there were twe types of great families at that time, the landowners living in their home districts and keeping armed or self-defense organizations, and the noted families well-known not only in their homeland but also in various places in China. Cao Cao conquered the former in his early days of making process of military power. But the latter occupied important positions all the time in his government.

Cao Cao opened up opportunities for the talented. Did not this policy conflict with the promotion of the noted families? This is a question of this paper. The continuation of family and official position is a necessary for the making of aristocracy. The talented people rised suddenly did not be accepted to the aristocratic society, and their sucess ended in their lifetime in many cases.

《個人研究》

曹操政権と豪族

堀　　敏一

1　問題の所在

曹操についてはすでに多くが語られているようにみえる。1959年，郭沫若氏が歴史劇『蔡文姫』を発表して，三国演義およびそれにもとづいた民間劇の影響を修正し，曹操を再評価するよう提唱して以来，しばらくのあいだ論争が続いた。その論争点は，黄巾反乱の農民勢力との関係，烏桓討伐は反侵略戦争かどうか，曹操の思想・政策は法家かどうか，彼は寒門中小豪族の代表か大豪族の代表か等が主なものといってよいであろう[1]。しかし私にとってどうにも物足りないのは，漢から魏晋南北朝への時代的推移のなかで，転換点にあたる三国時代の主要政権，曹操政権の歴史的位置づけがはっきりしないことであった。

もちろん論争のなかでさかんに歴史的役割ということが言われている。しかし中国の歴史家にとって重要なのは，歴史を進める主役である人民との関係如何，支配階級の大豪族との関係如何，民族を護るための反侵略戦争であったかどうかというような点であって，それらは歴史的というよりは通時代的な問題なのである。それらのなかで中央集権を進め平和をもたらしたという評価もなされている。中国の歴史を一治一乱としてみればそのような評価もなされようが，しかし中央集権化は専制権力の強化であって，それが歴史にとってプラスになるかマイナスになるかは一概にいえないであろう。

ただこの時代が奴隷制から封建制への転換点にあたるとする主張はあった。この問題は別におこなわれていた時代区分をめぐる論争点であるが，当時この説は少数意見であって，曹操をめぐっては充分具体的な論議にはならなかったと思う。しかし民衆の組織・支配の形態は，時代の性格を考えるうえでの基本的な問題点であって，この点に主要な関心を向けたとみられるものに好並隆司氏の曹操論がある[2]。ただ好並氏は漢代以来の農民を，古典古代的社会が成立する以前の先駆的時代の小農民と位置づけており[3]，その観点から曹操の屯田制・戸調制・兵戸制等を検討している。それではいつ中国で古典古代的農民が出現するのであろうか。農民をそのように理解するのはマルクスの言によっているのであるが，マルクスはヨーロッパについて述べているのであって，それがヨーロッパ以外の地域にあてはまるという保証はないであろう。

私が関心をもつのは，漢から魏晋南北朝に移るにともなって，貴族政治の時代あるいは貴族制社会が成立したといわれている点である。日本では周知のとおり漢・魏の交を古代から中世への移行期とする説と，なお古代社会が連続するとみる説が対立している。しかし貴族制の成立という点について

は，そういう意味での転換期とすることに両者の間に異論がない。もっとも魏晋南北朝の貴族は漢代の豪族から発生したものである。この豪族と貴族との関係を連続とみるか非連続とみるかによって，両者の間に対立が生じるということもできる。漢代には選挙制度を通じて地方豪族が中央に進出し，後漢代にはすでに豪族連合政権が成立したとする説もかつてあった。しかし後漢末清流豪族の激しい反宦官（すなわち反中央）闘争をみれば，漢代の政権が六朝貴族政権にスムーズに移行したわけでないことは明らかであろう。その間に魏・晋の政権があるわけだが，なかんずく曹操政権の位置づけが従来の研究でははっきりしていないと思うので，その点を多少考えてみたいのである。

曹操の破格の人材登用はあまりにも有名である。それは才能によってのみ人を推薦せよといい，不仁不孝の者も治国用兵の術を有すればかまわないという。このような名教の否定は，清流豪族の擁護する思想とはまったく一致しない。それゆえ上記中国の曹操論争のなかでも，曹操を中小豪族の味方とする論者が多いのであり，好並氏は土豪層と小農民層を基盤として皇帝制再編を意図したと解している。しかしそれでは六朝貴族政権はどうして生まれることができたのであろうか。貴族政権は清流豪族ないし大豪族を抜きにしては成立しないのではないだろうか[4]。あるいは好並説は政権が拠って立つ郷村の共同体秩序を整備したという意味に解すべきかもしれない。それにしても支配階級を抜きにした政権は考えられないであろう。

曹操政権と清流ないし大豪族との関係に触れたものに，唐長孺氏と川勝義雄氏の研究がある。唐氏はこの時代を封建制成立期とする理解に立ちながら，封建領主としての大姓・名士と後漢末以来の地方政権および曹操政権との関係を論じている。唐氏は後漢末以来清議を唱えた名士は主として大姓・冠族から出ているとし，三国政権の上層統治者はこれらの大姓・名士から成り，それが魏晋士族の基礎をなしたという[5]。ここでは大姓と名士の区別はほとんどされていないが，曹操政権に採用された人士の記述は本稿の参考になる。

川勝義雄氏は曹魏政権の主流が清流勢力にあり，それが六朝貴族の淵源となったとする[6]。川勝氏の清流理解については多くの批判や論議があるが，それについては近年の渡辺義浩氏のゆきとどいた紹介に譲りたい。渡辺氏が後漢末の党人の名声から始まって，同様な行動規範をもつ人々を名士とよび，そこから六朝貴族が発するとする点は川勝氏の清流と同じである。しかし渡辺氏は党人の反中央闘争から始まった名士層が，皇帝権力とは別個の自律的秩序をもった世界を形成し，それが六朝貴族の独自の世界に連なるとするのである[7]。そこでは三国政権との関係は，皇帝と名士との別個の勢力の間の攻めぎあいや妥協によって成立すると解されている[8]。

実は皇帝制と地域社会との二つの秩序の対立は，そもそもはじめから秦漢帝国に内在するものと考えるべきではないだろうか[9]。この二つの秩序を結んだものは，官僚を地域社会から採用する選挙制であり，地域社会において名声を挙げる生き方もそこから生じたのである。ただ後漢末の宦官と党人との闘争は二つの秩序の連絡を絶ちきった。その間に名士らの社会も地域的な広がりをみせるとともに[10]，彼らの間の階層をも形成していく。しかしこれらが皇帝権力との関係を修復し，王朝貴族を成立させていくためには，曹操から晋にいたる政権の役割を考えなくてはならないであろう。もちろん六朝貴族は郷党に根をおいている。しかし同時に彼らは王朝の官僚でもあり，この官僚なしには皇

帝権力は成り立たないのである。であるから渡辺説のように名士社会と皇帝権力との対立を固定し，両者の関係という形で問題を考えるのがよいかどうか疑問に思うのである。

たしかに貴族勢力は皇帝権力とは別の世界をもち，皇帝権力を制約する働きをなす。しかしそれが後漢末から発するのだとすると，それ以前の皇帝権力の浸透を過大に評価する傾向を生みだしはしないかと思う。私は前述のように皇帝権力に対立する地域社会が秦漢帝国に内在するからこそ，そのなかから台頭する豪族・貴族が皇帝権力を制約する存在になるのだと思う。だから秦漢から隋唐まで一貫して強大な専制権力は成立しないのだと考えるのであるが，その点は本稿の課題ではない。本稿はその歴史過程の一端に触れてみようとするにすぎない。

2　曹操の仕官

曹操の家は当時の行政区画でいえば沛国の譙県にあった。これは現在の安徽省亳県にあたるが，その南郊で1974年以来曹氏一族の墓群が発掘されている。そのうちの一基は有名な宦官曹騰か，その養子となった曹操の父曹嵩のものではないかと思われるが，曹氏はもともとこの地の豪族で，これらの墓群は水経注の記述と照らし合わすと，曹騰の兄弟や甥らの墓かと思われる[11]。曹嵩は元来同郷の夏侯氏の出であるが，これらの豪族らが族的集団をなし，相互に婚姻を通じながら[12]，宦官との関係をも保ち，この地に勢力を植えていたものと思われる。曹嵩は一億万銭の大金を出して太尉の位を買ったというから（後漢書宦者列伝），いわゆる濁流豪族の典型である。

曹嵩が太尉の地位を得たのは，以下に述べる曹操の仕官後であるが，曹操は仕官してまもなく上書を提出し，賄賂が横行し宦官と結託して私党を結ぶ風潮を非難している（後漢書劉陶伝）。董卓の乱後に曹操が挙兵したとき，父の曹嵩は輜重百余輌といわれる大財産と妾を連れ，曹操の弟の疾・徳らとともに山東地方に避難し，かえって陶謙のために殺されている（後漢書宦者列伝・三国志武帝紀注）。曹操と父との間にはおそらく通じあうものがなかったのであろう。曹操の幼少時の無頼的行為は有名であるが，それはこのような父と家系にたいする反抗を示すものであろう。

曹操は以上のように濁流の出で放蕩無頼であったが，一方では早くから当時の名士の一部に認められていたといわれる。武帝紀によると，「ただ梁国の橋玄と南陽の何顒のみこれを異とし」たという。何顒は後漢書党錮列伝に伝をもつ党人である。その伝には，「初め顒，曹操を見て歎じて曰く，『漢家まさに亡びんとす，天下を安んずるは必ず此の人ならん』と。操，是を以てこれを嘉ぶ」とある。顒伝ではこの時期がいつなのかはっきりしないが，三国志荀攸伝注に引く張璠の漢紀に，「党事起こるに及び，顒の名其の中に在り。乃ち名姓を変えて，汝南の間に亡げ匿れ，至る所皆其の豪傑と交結す。顒既に太祖を奇とし，荀彧を知り，袁紹これを慕い，ともに奔走の友と為る」とあるのが参考になる[13]。因に顒伝によると，何顒が「汝南の間に亡げ匿れ」たのは第二次党錮（169年）のときで，そのころ曹操と行き逢ったのである。なお汝南と譙県は比較的近いことも注意される。

橋玄は梁国睢陽の人，その郷里は譙県に比較的近い。後漢書の伝によると，党錮のとき官にあり，その直後司空・司徒に登っているから党人ではない。しかし武帝紀注に引く王沈の魏書に，「太尉橋

玄，世々人を知るとの名あり。太祖を覩てこれを異として曰く，『吾れ天下の名士を見ること多きも，未だ君が若き者あらざるなり。君善く自ら持せよ。吾れ老いたり。願わくは妻子を以て託することを為さん』と」とあるから，名士と交際の深かった人であり，曹操との出会いは党錮の後であろうが，太尉となったのは曹操任官後の光和中であるから（同注所引張璠漢紀），その前のことである。

何顒や橋玄のような人々が曹操に期待したのは，動乱の時代を予見して，それを切り抜けるために，彼ら名士とは違った型の人物を必要とすることを知っていたからにちがいない。そのことは上に引いた両者の言をみればわかる。この関係は後の曹操政権と名士・豪族との関係の先駆だといってよい。党錮列伝には，党人の中心であった李膺の子の李瓚についても，「初め曹操微なりし時，瓚其の才を異とし，まさに没せんとするに，子の宣等に謂いて曰く，『時まさに乱せんとす，天下の英雄は曹操に過ぐる無し。張孟卓は吾れと善く，袁本初は汝の外親，しかと雖も依る勿れ。必ず曹氏に帰せよ』と。諸子これに従い，並びに乱世に免る」とある。名士の側から乱世の英雄としての曹操に注目した点は同じであるが，これは曹操任官後のことであるかもしれない。

曹操の方でも，何顒の言を聞いて喜んだように，名士に近づこうとする意志があった。武帝紀注に引く郭頒の世語によると，橋玄は曹操にむかって，「君未だ名あらず，許子将に交わるべし」と勧めたという。許子将は許劭，汝南の人で，月旦評で有名な名士である。彼が月々行う人物批評は，元来は政府が官吏を採用する際に行われる形式のものであった。それが後漢末の党錮以来，名士社会内部で行われるようになり，名士仲間で認められる重要な条件になっていたのだと思われる。橋玄は許劭の評言をえて名声を挙げるよう曹操に勧めたのであり，曹操はおそらくその紹介によってさっそく許劭に近づいた。

曹操と許劭の出会いについては幾つかの伝えがある。武帝紀注の孫盛の異同雑語には，「嘗て許子将に問う，『我れは何如なる人ぞ』と。子将答えず。固くこれに問う。子将曰く，『子は治世の能臣，乱世の姦雄なり』と。太祖大いに笑う」とある。後漢書許劭伝の記述はもう少し詳しい。「曹操微なりし時，常(かつ)て辞を卑くし礼を厚くして，己が目を為らんことを求む。劭，其の人を鄙しとして肯て対えず。操，乃ち隙を伺って劭を脅かす。劭，已むを得ず曰く，『君は清平の姦賊，乱世の英雄なり』と。操，大いに悦びて去る」というのがその記述である。世説新語・識鑒篇には，橋玄の直接の評語として，『君は実に乱世の英雄，治世の姦賊なり』の語が載っている。許劭との具体的な関係の記述をみると，橋玄の評語とするのは適当であるまい。

上記の記述をみると，曹操の目的ははっきりしている。それは「名」を得ること，「目」を得ることにあったのである。名は上に単に名声と訳したが，目は「題目」ともいい，もう少し具体的な人物にたいする評語であり，漢代選挙のときの行状，後の中正が下す状にあたる[14]。それはちょうど許劭が曹操に与えた評語，「治世の能臣，乱世の姦雄」のように，簡潔に人物の性格を表す形式のものであった。これを得ることによって曹操は名士社会に受けいれられ，それを背景として官界に打って出る態勢が整ったのである。もっとも曹操はこの評語を簡単に得られたのではない。本来的に貴族的体質の許劭は，曹操を嫌って対話を拒否した。曹操は彼を脅迫して評語を出させたのであるが，それはいかにも曹操らしいやりくちである。操が「大いに笑った」とか，「大いに悦んで去った」とかい

うのは，彼が目的を達してほくそ笑んだことを示している[15]。

橋玄と許劭との関係は，党錮事件が終わった後の中央官界と名士社会との関係が，少しづつ修復されつつあったことを示すものであろう。同時に，橋玄が曹操を許劭のもとに送ったことは，名士社会の独自の権威が確立していたことをも示すであろう。こういう状況のもとで，曹操は174年（熹平3年）二十歳で孝廉に挙げられ，洛陽北部尉に任官された。曹操の得た目が功を奏したことを物語るものであろう。

こうして曹操は濁流の家柄にもかかわらず，名士・清流派の官僚として出発する。すぐ近臣に憎まれて地方の頓丘令に転出させられたが（武帝紀注引曹瞞伝），議郎に復すると，竇武・陳蕃らが害されて以来，姦邪が横行し善人が抑圧されている現状を，痛烈に非難する上書を提出する（同紀注引魏書）。また司徒の陳耽と一緒に，高官が賄賂をとり，宦官と結託して不当な人事を行い，私党を作っていると上言したりする（前述後漢書劉陶伝）。これらは反感を買うばかりなのであるが，初期には名士派の官僚であったことが，曹操の気質にも一致していたことと思われる。また漢帝国の命運が尽きようとしているとき，在野に基盤をもつ名士層の側に立つ方が得策であることを承知していたのかもしれない。

しかし陳蕃の子の逸が宦官の有力者を滅ぼそうと思い，王芬・許攸・周旌らが霊帝の廃立を図ったときには参加を拒み（武帝紀注引九州春秋・魏書），また何進が袁紹と宦官の全滅を図り，外部の董卓の軍を呼ぼうとしたときにも反対している（同上魏書）。いずれも失敗を予見しているのである。

3　曹操政権と土豪勢力

董卓が都洛陽の実権を握ると，曹操は洛陽を脱出して，189年（中平6年）陳留郡で家財を散じ，地方の名士衛茲の資金援助をもえて，兵を蒐めて挙兵した。191年（初平2年）東郡太守となり，翌年兗州牧となって青州黄巾軍を降伏させ，その兵によっていわゆる青州兵を組織した。これによって群雄としての基地をつくり，一応の兵力をも確保した。しかしこの段階での曹操は一地方勢力にすぎない。各地には大小の同じような地方勢力が割拠していた。

次節で述べるように，この段階ですでに名士の荀彧が曹操に投じているが，多数の名士が曹操の勢いをみて，その傘下に集まるのはしばらく後である。初期に曹操と関係をもった豪族といえば，郷里に武装集団を結成していた人々である。川勝氏は同じ豪族でも，前者の名士のような人々を「豪紳」とよび，後者の地方武力集団の統率者を「豪侠」とよんで区別している[16]。この豪侠という呼び名は，その軍団の構成を任侠的関係によって理解しようとする見解によるので，これには異論も提出されているが[17]，豪族をこのような二類型に分けることには問題がないであろう。

川勝氏のいう豪侠，武力集団を形成した人々については，氏の作成した表があるので，ここではそのなかから幾つかの事例をとりだして具体的にみてみよう。

李典は父の時代から軍に従ったが，三国志本伝には，「賓客数千家を合して乗氏に在り」とあり，初平中（190～193年）曹操に従ったが，曹操が袁紹と戦ったときに，「宗族及び部曲を率いて穀帛を

輸して軍に供し」たといい，また「宗族・部曲三千余家，乗氏に居る」とも記されている。その集団は曹操に従属してからも拠点の乗氏県にあったのであるが，その宗族・賓客は日常は李氏の荘園において農蚕に従事する人々であって，その生産物が曹操の軍陣に届けられたのであろう。そしてまた乱世に際会して彼らは武装し，李氏の部曲を形成していたのであろう。しかし李典は最後にその兵を魏都に移すことを希望し，「部曲・宗族万三千余口を徙して鄴に居らしめ」たという。乗氏の荘園と直接生産者（賓客等）が残ったかどうか知らないが，宗族と兵力とはほとんどが曹操の膝下に移されたのである。

許褚は曹操と同郷の譙国譙県の人であるが，三国志の伝に「漢末，少年及び宗族数千家を聚めて，共に壁を堅くして寇を禦ぐ」とある。これは塢壁にこもって郷里の自衛を策したことを示している。のちに郷里を離れて曹操の宿衛に入ったが，それはその強力さによって曹操に懇望されたのであろう。それゆえその兵は解体されず，「諸々の褚に従う侠客，皆以て虎士と為す」とあるように，そのまま宿衛の一隊を形成した。それが郷里から離れやすかったのは，その兵力が「少年」あるいは「侠客」とよばれており，生産から遊離した人々であったからであろう。李典も許褚も宗族を中核とする自営集団であるが，その兵力には農民的部曲と遊民的性格をもつものとの違いがあったようである。

任峻は中牟の人で郡吏となっていたが，曹操の軍が中牟に入ったときに，おそらく郡の豪族であった張奮と相談して，全郡を曹操に委ねることにした。その伝には「別に宗族及び賓客・家兵数百人を収めて，太祖に従わんことを願う」とあるから，郡吏であって郡の政治・防衛に重要な役割をはたすとともに，それとは別に郷里には宗族と従属農民と自営兵力とをもっていたと思われる。任峻はこれらを率いて曹操に従属したが，この集団は曹操の本軍に吸収されず，峻はこの集団を率いたまま曹操に従って転戦したと思われる。

臧霸は刑を受けた父を奪って亡命し，陶謙に従っていたが，仲間とともに兵を集めて自立した。呂布が敗れたとき曹操に帰し，青・徐2州の統治を委任された。曹操が袁紹と戦っていたとき，霸が東方を抑えていたので，後顧の憂いがなくてすんだという。袁氏が亡んだ後，彼は「子弟及び諸将・父兄・家属」を都に送ったということであるが（三国志本伝），本伝の注に引く魏略によると，219年（建安24年）曹操が死んだとき，「霸の所部及び青州兵，以為えらく天下まさに乱せんとすと。皆鼓を鳴らして擅に去る」とある。臧霸の率いた兵はもともと地方武力集団であったにはちがいないが，上記のような郷里の自営集団ではなかった。自営集団は郷里に根ざして相互に強く結ばれていたのであるが，臧霸の集団はより規模が大きかったと思われるにかかわらず，霸の統率力が強かったのであろうか，自衛団の場合と同じく，その兵力はそのままの形で曹操一代続いていたのである。

田畴が郷里の右北平の徐無山に形成した自衛団はあまりにも有名で，すでに多くの学者が論じているし，私自身もかなり詳しく述べたことがあるので，ここでは要点だけを記しておきたい。彼ははじめ「宗族ほか附従（近親・使用人）数百人」を率いて山中に入ったのであるが，これには防衛施設の塢が伴ったと考えられる。そこに一般農民が集まってきて五千余家におよび，相当な集落を形成するまでになった。そこで田畴は父老らの支持を取りつけて，集団の指導者となり，法律・礼儀を制定し，学校を設置したという。これは単なる自営集団というよりは，地域父老らの支持の上に成り立つ

新たな地方政権といってよいであろう。もっとも上記の李典の場合も，三千余家といい，万三千余口という多数であるから，その部曲は一般農民から成り立ち，相当な政治勢力であったかもしれない。田畴は曹操の勢力が迫ると，それに従属せざるをえなくなり，「尽く其の家属及び宗人三百余家をひきいて鄴に居る」とあるように，一族を魏都に移すのであるが，彼自身は曹操に臣属せず，徐無山との関係を断たなかった[18]。

実は曹操自身の集団もそれが挙兵した当初は，地方の一武装集団にすぎなかった。曹操は郷里に帰る途中の陳留で，兵を募って挙兵したのであるから，郷里自営集団とは違うし，彼が挙兵したとき，既述のように父や弟とは袂を分かったのであるが，郷里から一族が馳せ参じている。三国志第九巻はそのような一族の伝記であるが，それによると，曹操の従兄弟の曹仁・曹純・曹洪・夏侯惇・夏侯淵，曹氏の養子の曹邵らが挙兵時から参加しており，族子の曹休は江南の呉から間道を抜けて駆けつけた。夏侯氏は曹操の父曹崇の実家で，夏侯惇らは曹崇の甥にあたる。夏侯氏は飢饉のために窮乏していたが，曹氏は多く官人の子孫で富裕であったと思われる。曹仁の如きはこれよりさき，少年千余人を集めて暴れまわっており，それを率いて合流した。曹邵も「徒衆」を募って参加した。このほか同郷の史渙や，はじめ夏侯惇に従った韓浩らは，曹操の直轄軍の指揮をとった。この直轄軍の周囲に，上記の武力集団が存在するようになったと考えられる[19]。

さて以上の地方武力集団は，各地に根強い基礎をもっており，臧霸の例が示すように，曹操が袁紹らとしのぎを削っていた段階では重要な役割を担っていた。しかし曹操の覇権が確定していくと，その軍の団結力は継続するとしても，多くが操の根拠地の鄴に移されて，その独立性を失うことになる。それは何故であろうか。当時の豪族が宗族・郷党の人々に基礎をおくことはみな同じである。ただ次節に述べる名士たちの方が，一見郷里の生産点から遊離しているようにみえる。しかし名士たちは郷里を超えた広い地域の名士たちと交友関係をもち連絡網を組織している。川勝氏は彼らの政治的役割を，「強弱さまざまの権力体を相互に結びつけ，曹操のもとに整序してゆくことによって権力体相互の間の結節点を握ることになる」と述べている[20]。それに比べると上記の土豪たちは，狭い地域に結びついているだけに，孤立する傾向にあり，曹操のような強力な群雄に屈服していかざるをえない情勢にあったのだと思う。

4　曹操政権と大姓・名士

前節に述べたように，曹操政権初期にこそ，地方武力集団を率いた土豪たちの一定の役割があったのであるが，曹操政権が確立してくるにともなって，その中心を握るようになるのは，川勝氏のいう豪紳たち，唐長孺氏のいう大姓・名士らである。

最初に曹操政権前期の参謀として最も功績のあった荀彧を中心として考えてみよう。荀氏は潁川郡の大姓で，荀彧の祖父の荀淑は後漢末の清議の人士として名高く，その8人の子は「八竜」と讃えられ，その一人の緄の子が彧である。後漢書および三国志の荀彧伝によると，若いとき何顒に認められて「王佐の才」と言われたというが，第2節に引いた三国志荀攸伝注の漢紀によると，宦官に追

われて逃亡生活をしていた何顒は，曹操・荀彧・袁紹らと交際したというから，早くからこれらの人々の間に関係ができていたと思われる。さらに言えば，八竜の一人の荀爽も党錮事件のとき逃亡生活を送っており，丹羽兌子氏は荀爽と何顒グループとの接触を推測しているから[21]，あるいはその接触を通じて荀彧は何顒グループに入ったのかもしれない。また曹操の先世の曹褒（曹崇の伯父）は潁川太守をしていたから（三国志曹仁伝注魏書），潁川の名士荀氏との間に接触があったかもしれない。

三国志鍾繇伝注に引く謝承の後漢書に，潁川太守陰脩が察挙した人物中に主簿荀彧の名を記しているので，彼は型どおりはじめ郡吏となり，それから孝廉に挙げられて亢父令になった。董卓の乱に官を棄てて郷里に帰り，父老らに潁川は戦場になるから避難するよう勧告するが聞きいれられない。たまたま同郷の冀州牧韓馥に誘われたので，宗族をひきいて冀州に向かったところ，この地が袁紹に奪われたので袁紹に仕えることになった。袁紹とは何顒グループを通して旧知の間柄であったと思うが，荀彧は袁紹の人柄を見限って，やはり旧知の曹操の方に帰することになる。戦乱のなかで自ら群雄になったり，父老らの協力を得て自衛団を形成することができなかった名士らは，こうして郷里から移動して，群雄の保護を求めざるをえないのである。

曹操が挙兵したのは189年（中平６年），荀彧が曹操に帰したのが191年（初平２年），この年曹操は東郡を奪って拠点を得，袁紹から東郡太守に推薦されるのであるが，荀彧はそれをみて曹操の下に奔ったのである。曹操の参謀としての荀彧の政治や作戦をここは述べる場所でない。荀彧が曹操の名士登用に最も功があった点だけを注目してみよう。

本伝によると，曹操は荀彧をつねに相談相手としていたが，あるとき「卿に代わって自分の参謀になれる者は誰か」と尋ねると，「荀攸・鍾繇」と答えた。これよりさき策謀の士として戯志才を進め，志才が死ぬと郭嘉を進めた。曹操は彧を「人を知る」ものとみなし，彼が進めた者をみな要職につけたという。

また裴注に引く彧別伝には，「前後挙ぐる所の者は，命世の大才。邦邑では則ち荀攸・鍾繇・陳羣，海内では則ち司馬宣王（司馬懿），及び当世知名の郄慮・華歆・王朗・荀悦・杜襲・辛毗・趙儼のともがらを引き致し，終に卿相と為る者，十数人を以てす。士を取るに以て揆を一にせず。戯志才・郭嘉等は俗に負くの譏あり，杜畿は簡傲にして文少なきも，皆智策を以てこれを挙げ，終に各々名を顕わす」とある。

「邦邑」とは郷里，潁川を指す。荀彧の推薦者には同郷の潁川出身者が多く，ここに挙げられた者では，一族の荀攸・荀悦，郡吏時代の同輩の鍾繇，後に九品官人法をつくって同郷者の推薦を制度化した陳羣のほか，杜襲・辛毗・趙儼・戯志才・郭嘉ら，13人中９人が潁川の出である。そのうち趙儼・戯志才は家世不明であるが，他は大姓か名士であり，他郷出身者もみな大姓・名士といってよいようである。そのほか荀彧が推薦したと伝えられる者に，孫資（三国志劉放伝注引孫資別伝）・仲長統（後漢書本伝）があり，これらも名士と考えられる[22]。

潁川は当時の名士社会の中心であったが，川勝氏は曹操政権の首脳に，潁川派とならんで北海派があったとなし，上記荀彧推薦の華歆・王朗のほか，崔琰・国淵・王脩等を挙げている。その他に邴原・管寧らも北海出身である。氏によると，潁川グループの中核は荀氏・鍾氏・陳氏，北海グループの

中心は鄭玄と孔融にあったという[23]。潁川グループに属する上記の人々や，北海グループの人々をみると，荀攸・鍾繇・陳羣・郭嘉・杜襲・辛毗・趙儼・国淵・邴原・管寧らは，196年（建安元年）曹操が漢の献帝を董卓から奪ってこれを擁するようになったとき，漢朝の官吏や司空曹操の属官として任命されたものが多い。孔融もこのとき献帝の側近に徴せられて，曹操と接触するようになったのである（鄭玄は早く死んで曹操と関係ない）。

これよりさき191年の荀彧についで，翌192年（初平３年）曹操が兗州牧になったとき採用された程昱・毛玠・于禁，195年（興平２年）呂布を撃った前後に曹操についた袁渙・楽進・張遼・臧霸等がある。程昱は荀彧とともに初期の曹操の作戦に功があったが，これらの人々は袁渙を除いてさほどの名士ではない。ところが翌年曹操が漢帝を手中にしたことによって，名士の参加が急に多くなったのである。名士らにとって漢王朝の権威はまだたいへん大きかったのである。

その後200～203年（建安5～8年）袁紹に勝って河北を平定したのち，論功行賞のためであろうか，「治平には徳行を尚び，有事には功能を賞す」という，曹操のいわゆる人才主義を示す最初の令が出されている（武帝紀注所引魏書）。しかし名士を擁していたことで名高い袁紹を破ったのであるから，このとき多くの名士が曹操に降ることになった。三国志郭嘉伝注に引く傅子に，「河北既に平らぎ，太祖多く青・冀・幽・并の知名の士を辟召し，漸く臣としてこれを使い，以て省事(三国志集解は「従事・徴事」の誤かという）・掾属と為す。皆嘉の謀なり」とある。唐長孺氏は清河の崔琰や北海の王脩らはこのとき選抜されたとする。とくに崔琰は三国志の本伝に，「太祖，袁氏を破り，冀州牧を領し，琰を辟して別駕従事と為す」とあり，やがて丞相の東西曹掾属となって選挙を掌ったから，冀州の人士の採用は崔琰による者もあろうという[24]。これよりさき孫策・孫権のもとにいた王朗・華歆も官渡の戦いのころまでに徴用に応じていた。とすると潁川グループに比べて，北海グループの形成は多少遅れるといえるかもしれない。

華北をほぼ平定し終えた曹操は，208年（建安13年）南方に兵を出し，荆州を征服した。後漢書劉表伝にそのときのことを次のように記している。「操の軍，襄陽に到るに及び，琮，州を挙げて降らんことを請う。・・・操，琮を以て青州刺史と為し，列侯に封ず。蒯越等侯たる者十五人。乃ち[韓]崇の囚を釈き，其の名重きを以て甚だ礼待を加え，州人の優劣を条品せしめて，皆擢んでてこれを用う。」韓崇は劉表の時代に曹操のもとに使いし，すでに操への帰順を勧めて劉表の怒りを買い，自由を奪われていたのである。曹操の軍が近づくと，越らとともにまた投降を勧めた。曹操は韓崇に同郷の人物の優劣を品評させ，それに従って登用したというのである。

この年，孫権は劉備と呼応して合肥を囲んだが成果がなかった。この前後孫氏治下の揚州の人士からも曹操の臣下となった者がいる。三国志劉曄伝注に引く傅子に，「太祖，曄及び蔣済・胡質等五人を徴す。皆揚州の名士なり」とあり，ここでも名士が注目されたことが記されている。

実はこの荆州・揚州の名士採用については，有名な何夔の上言が影響しているのではないかと思われる。208年の初め，曹操は漢の丞相になり，何夔はその東曹掾になった。三国志同伝によると，彼が次のように提言したという。「軍興りてより以来，制度草創にして，用人未だ其の本を詳らかにせず。是を以て各々其の類を引き，時に道徳を忘る。夔聞く，賢を以て爵を制すれば，則ち民は徳を慎

み，庸を以て禄を制すれば，則ち民は功を興すと。以為えらく，自今用うる所は，必ず先にこれを郷閭に核(かんが)え，長幼をして順叙ありて，相踰越すること無からしめん。忠直の賞を顕らかにし，公実の報いを明らかにすれば，則ち賢・不肖の分，居然として別れん。又『保挙故(ことさら)に実を以てせず』の令を脩めて，有司をして別に其の負を受けしむべし。・・・」

曹操政権前期の人材登用は，その時々の，個人的な抜擢によるものであって，制度的に確たるものがあるわけではない。そのために「各々其の類を引き」というような状況が生まれたという。もともと漢代では門生・故吏が推薦されたし，後漢末以来の党人結成によって，コネをもとめて名士の門に集まる人々が多かった。これは浮華とよばれて，曹操などの最も嫌うものであったが，曹操の人士登用にもその弊害が現れていると，何夔はいうのである。荀彧や郭嘉の人士推薦が，一般にそのようにみられたかどうかは知らない。何夔も賢や庸（実績）を採り，賞罰を明確にすることを述べて，人才主義を否定しているわけではないが，そのためにはまずその人格を郷里に問うことが必要だというのである[25]。しかし郷里に問うとなれば，郷里を支配している名士・豪族を優先させることになる。曹操も地方支配を安定させるためには，彼らの支持を得る必要があった。とくに辺遠地帯の荊州・揚州においてはそのことが重視されなければならなかったのであろう。

しかしこの頃から曹操政権の郷里重視が強まったかというと問題がある。実は曹操の「唯才を是れ挙げよ」とか，「不仁不孝にして治国用兵の術あれば，其れ各々知る所を挙げ，遺す所ある勿れ」等の法令は，多くはこれ以後の時期に出ているのである[26]。あるいはこれらの法令は，曹操政権のもとで名士が多数を占めるようになり，そのために何夔のような議論が高まってきたのに対抗して出されたのかもしれない。そしてこういうなかから，郷里の輿論によって挙げられる人物の徳性と，その人物の才能とが一致するかどうかという，いわゆる才性論が生まれてくるのであり[27]，のちの九品官人法も何夔の論に直結させることなく，このような問題をふくんで考えるべきであろう。

5　人才主義と名士社会

前節に曹操の豪族および名士採用の記録をみてきたのであるが，豪族と名士はかならずしも同じではない。名士の大部分は豪族の出であろうが，豪族には先述した土着豪族もあれば，濁流もある。上記に挙げた人々のなかにも，戯才志・郭嘉については，「俗に負くの譏あり」と言われている。これは名士社会の風俗にあわないので，彼らから非難を受けたということであろう。

郭嘉は袁紹の謀臣であった郭図と対面しており，ともに潁川の人であるから，おそらくは親族同士で相当の家であったと思われる。しかし三国志郭嘉伝所引の傅子に，「郭嘉少くして遠量あり。漢末天下まさに乱せんとするに，弱冠より名迹を匿し，密かに英雋と交結し，俗と接せず。故に時人多く知ること莫く，惟識達者のみこれを奇とす」とある。これは一般の名士が郷里社会で名声を挙げようとするのとは違った生き方である。乱世を予測して，逆に名を隠し，俗世間すなわち名士社会と接触しない生き方を選んだのである。その反面に，当事の社会からいえば裏街道を歩いていたような豪傑たちと交わったのであろう。だから郭嘉は名士らの道徳に縛られない所があって，よく不品行だと言

われるが，それは名士の仲間内からの言であるから，割り引きして受け取らなければならないと思う。

このような郭嘉を，名士中の名士である荀彧が推薦し，しかも自分の跡継ぎとまで言っているのである。名士たちも乱世のなかで実力ある群雄に頼らなければならないことを知っていた荀彧は，群雄の配下にも道徳よりも才能と行動力ある人間が必要であることを知っていたのだと思う。そして無頼の豪傑であった曹操も，この推薦を気にいったのである。

郭嘉伝にはまた，「初め陳羣，嘉の行検を治めざるを非として，しばしば廷に嘉を訴う。嘉の意自若たり。太祖いよいよますますこれを重んず。然れども羣も能く正を持するを以て，またこれを悦ぶ」とある。陳羣の意見は潁川の郷論を代表するものであろう。これにたいし同じ潁川の出身ながら荀彧は政権のためにものを考えている。これは当時の名士社会が変貌し，この両面をもたなければならなくなったことを示すものであろう。一方曹操の側にしても，郭嘉のような徳行には欠けるが能力のある人間を重用するとともに，陳羣のような地方郷里社会に根をおく名士をも尊重する必要があったのである。

「唯才を是れ挙げよ」以下の，曹操がたびたび出したいわゆる人才主義の法令は，とかく名士社会の風俗・思想に対立するように言われるが[28]，前節で指摘したように，これらの法令は比較的遅い時期に出されているのであり，それより早く名士の側から郭嘉のような人物が推薦されてきているのである。名士社会が政権と接触して変容してきていることを考慮しなければならないであろう。それは後漢末以来の地方名士らが，王朝貴族に変貌していく過程として考えられるであろう。ただし郭嘉を勧めた荀彧にしても，漢王朝を否定できずに自殺したのであるから，当時の名士たちが将来への見通しをどれほどもち得たか疑問である。

三国志荀彧伝には，荀彧が曹操と袁紹とを比較した論が載っている。このような比較論は郭嘉伝にも郭嘉の論として載っている。荀彧のは4か条，郭嘉のは10か条であるが，内容・字句に似た点があり，おそらくはもと中原の二大勢力であった袁紹と曹操との興味深い比較論が民間に流布していたのが伝えられたのであろう。ここでは荀彧伝と郭嘉伝の論から，両者の人材登用にふれた部分を引用してみよう。

まず荀彧の言とされるものは次のとおりである。「紹の貌は外は寛にしてうちは忌，人を任じて其の心を疑う。公は明達にして拘らず，唯才の宜しき所のみ。・・・紹は世資に馮り，従容として智を飾り，以て名誉を収む。故に士の能寛やかで問いを好む者多くこれに帰す。公は至人を以て人を待ち，誠心を推して虚美を為さず。行已に謹倹にして，功ある者に与うるには，恡惜する所無し。故に天下の忠正・效実の士，咸用いられんことを願う。」

郭嘉の言なるものもほぼ同じである。「紹は礼繁く儀多し，公は体自然に任ず。・・・紹は外は寛にして内は忌，人を用いてこれを疑い，任ずる所は唯親戚・子弟のみ。公は外は易簡にして内は機明，人を用いて疑うなく，唯才の宜しき所は，遠近を問わず。・・・紹は累世の資に因り，高議揖譲，以て名誉を収む。士の言を好み外を飾る者多くこれに帰す。公は至心を以て人を待ち，誠を推して行い，虚美を為さず。倹を以て下を率い，功ある者に与えるには吝むところ無し。士の忠正・遠見

にして実ある者，皆用いられんことを願う。」

ここでとくに注意したいのは，袁紹が累世の家門で，知識や礼儀によって名声を重んじ，彼のもとに集まる者も，才能よりもはでな議論を好む者が多かったということである。これにたいし曹操は才能のみに重きをおき，はでな言動を排して，忠実で実効の挙がる者を採った。袁紹主従にみられるのは，後漢末以来の清議の士の典型的な特徴である。漢末宦官の圧力に抗して死に物狂いで戦った彼らも，元来が仕官を目的とする闘争であれば，有力者の門に大勢出入りして，議論（すなわち清議）に明け暮れし，たがいに仲間を推薦しあう「浮華」とよばれる風潮を当時から生み出していた。その敵が消滅し，名士の社会が確立するにともない，言動は実践から遊離して，浮華の弊害がますます甚だしくなっていたのである。曹操は地方社会を握る名士らを無視しなかったが，才能と実効に重きをおいた。

こういう曹操の政策に協力しなければならなくなったことから，清流名士のなかから，「事功派」ないし「権道派」というべき人々が生じたという説がある[29]。しかしこれらを清流名士の一派と考えるのではなく，清流名士社会の変化のなかから生じたとするのが，上に私が考えてきたことである。曹操のいわゆる人才主義も，これに対立するのは名士社会一般ではなくて，名士らの一部がもつ浮華の一面であったと思う。

この浮華の一面を代表し，曹操に嫌われて殺された者に孔融がある。孔融は孔子20世の子孫だという。子供のころから利発で，李膺との面識があり，党錮のときには有名な張俊を匿まった。何進に辟挙されて，その後北海の相になり多くの名士と交わった。

三国志崔琰伝注に引く司馬彪の九州春秋によると，「自らおもえらく，智能は優れ贍り，溢るる才は世に命だかく，当時の豪俊皆及ぶ能わずと。また自ら大志を許し，まさに軍を挙げ甲を曜かし，羣賢と功を要め，自ら海岱に於いて根本を結殖し，碌々として郡守に平居するを肯んぜず。方伯に事えて，期会に赴かんと欲するのみ」とあるように，たいへんな自負をもち，抱負だけは高かった。「然れどもその任用する所は，奇を好んで異を取る，皆軽剽の士なり。稽古の士に至っては，謬りて恭敬を為し，これを礼すること備わると雖も，ともに国事を論ぜず。・・・高談・教令に及んでは官曹に盈ち溢れ，辞気は温雅にして，玩でて誦すべきも，事を論じ実を考えるに，悉くは行うべきこと難し」とあるように，軽薄な所があって，実行力を伴わなかったから，黄巾に攻められて，たちまち逃げ出す始末であった。後漢書孔融伝は孔融に好意的であるが，それでも「融，其の高気を負み，志は難を靖んずるに在り。而れども才疎にして意広く，迄に成功無かりき」と書いている。

曹操と接触するようになっても，気位だけは高かったから，しばしば曹操を馬鹿にした。有名な話であるが，曹操が酒を禁じて，酒は亡国のもとだというと，「むかし桀紂は色を以て国を亡ぼしました，今婚姻を禁じないのですか」と言ったり，袁紹が亡んだとき，曹丕が袁熙の妻を奪うと，「武王は紂を伐って妲己を周公に賜いました」といい，曹操が反問すると，「今を以て推し量ると，そうであったろうと想うだけです」と答えたり，エピソードには事欠かない。やはり崔琰伝注に引く漢紀には，彼が権勢を失っても，「賓客日に其の門に満ち，才を愛し酒を楽しみ，常に歎じて曰く，『坐上客常に満ち，樽中酒空しからざれば，吾れ憂無し』」とある。

武帝紀注の魏書によると，袁紹でさえも，もともと孔融と仲悪かったからではあるが，彼を殺すよう曹操に書き送っている。そこには殺さなければならない理由が書いてあったにちがいない。そのとき曹操は名士らの人心を得る必要からそのままにし，かえって袁紹との溝が深まったという。

吉川幸次郎氏は孔融について次のように述べている。「この機智と名声と，そうしておそらくは容貌にも，めぐまれた名士は，曹操のもっとも好む型の人材，すなわち実務の才では，なかった。つまり曹操の企図する新しい時代を，曹操とともに促進し得べき人物ではなかった。・・・一方，孔融の方でも，曹操に多くの敬意を払わなかった。・・・」

「要するに孔融は，曹操と歩調をあわせ得べき人物ではなかった。過剰な論理，またその堕落した形態としてある過剰な機智，またそれらの人間関係に於ける表現として，論理を同じくし機智を同じくし得る人々の間にふりまかれる過剰で放漫な友情，それらによって成り立つ後漢末文化人の，最後の代表者で，孔融はあった。それら後漢末の風気の中から，人間の精神を自由にする面だけを，巧妙に効果的に継承し，しかも過剰な部分は切りすてて，より多くの効果をめざす実際家の曹操とは，そもそも肌合いがあわなかったのである[30]。」

曹操は孔融を殺してしまったけれども，孔融のもった過剰な機智，過剰な論理が当時の社会から消えてしまったわけではない。名士の社交界で名を挙げるには，こうした機智や談論が最も適した面をもっており，それはのちの清談の特徴でもあった。その意味では孔融は，本来の清議からのちの清談へ移行する過程に生きていたということができよう。

清談は，清議の名教を否定した。曹操は孔融を殺す理由に，孔融に名教に違反する言辞があったことを挙げているが，それはもちろん名教を口実として利用したのである。しかし孔融の言辞にそういう類のことがあってもおかしくない。孔融は自分と同型の人物の禰衡を勧めているが，曹操はその名声を顧慮して，彼を殺さずに荊州に追い払った。禰衡には一種狂気のようなものがあって，ひとと相容れなかった（三国志荀彧伝注平原禰衡伝，後漢書文苑伝）。彼の面前で名士社会は変容を余儀なくされていたので，そういう時代が彼を反抗に駆り立てたのであろう。曹操が名声よりも実効を重んじたので，思想界では名と実との関係が問題にされ，やがてのちに清談の無名に行きつくのである。

6　寒門・単家の運命

曹操が才能と実行力を重視したところから，当然名士でも豪族でもないいわゆる寒門・単家の人々が進出した。まず曹操が乱世のなかで兵を挙げ，武力によって諸方を征服したのであるから，兵士のなかから戦功によって成り上がった者があろう。三国志于禁伝によると，于禁ははじめ鮑信という者の兵士であったが，鮑信が曹操の挙兵に協力してから，操の将軍王朗に属し，その推薦で大将軍になったという。同伝には「是の時，禁，張遼・楽進・張郃・徐晃と，倶に名将と為る」とあるが，このうち少なくとも楽進・張郃は家柄がないといってよかろう。

三国志裴潛伝の裴注には，「魏略の列伝は，徐福・厳幹・李義・張既・游楚・梁習・趙儼・裴潛・韓宣・黄朗十人を以て巻を共にす」とある。これらは寒門上がりの人物をまとめて一巻としたらし

い。このうち厳幹・李義は馮翊の東県の人であったが，東県に冠族がないのが幸いして，馮翊の甲族らに徳性を認められた。黄朗は他郷に遊学して，郷里から離れた所で能力を知られた。韓宣も郷里を出て，丞相府の役人となって高官に会う機会をつかんだという。同郷に名士がいる場合には，どうしても圧迫を受けたらしい。

前記魏略の張既の部分は，三国志張既伝注に引用されている。それには馮翊郡の小吏であった彼が，「自ら惟うに，門寒なれば，以て自ら達すること無からんと念う。乃ち常に好き刀筆及び版奏を畜え，諸々の大吏の乏しき者あるを伺って輒ち給与し，是を以て見識せらる」と記されている。日常の筆記具を貯めておくというのであるから，細心の涙ぐましい努力であるが，ともかく寒門としては認められなければどうにもならないのである。

やはり魏略によると，張既が郡吏であったとき，功曹に徐英という者がおり，張既を鞭ったことがあった。徐英は「馮翊の著姓」であったので，張既が出世したのちも挨拶しなかった。「自ら族氏既に勝り，郷里に於いて名行前に在るを見，加うるに前に既を辱しむるを以て，既の貴顕なるを知ると雖も，終に既に求むることを肯んぜず」とある。既の方が官位は上になったのだと思うが，郷里では英の方が上なのである。寒門は栄達しても差別されなければならなかったのである。

もっと甚だしいのは，三国志王粲伝注の魏略にみえる薛夏の例である。薛夏は天水の人で，「博学にして才あり」といわれた。天水には姜・閻・任・趙の四姓があって，これがいつも郡の上位に推される名族であった。ところが夏は単家だのに，これに屈服しようとしないのでたいへん憎まれた。そこで夏は郷里を逃れて都に出たところ，曹操はその名を聞いて，はなはだこれを礼遇した。それでも四姓は都に手をまわして夏を捕まえ，これを潁川郡に移して獄につないだ。曹操は出征中にこれを聞いて，夏が殺されるだろうと判断し，潁川郡に通告してこれを解放させ，軍謀掾に任命した。薛夏は病死するとき，その子に天水に帰るなと遺言したという。単家の優れた人物と郷里の有力者との間の軋轢はこのようなものであった。だから政権の側から積極的に優遇しようとしても，本人と郷里との対立はなくならなかった。

上記の裴潛伝の注に引く魏略は，最後に魏略の著者魚豢の感想を記し，これら寒門の人々の才能と努力が並々ならぬものであったことを述べて，「各々根を石上に著けて，陰を千里に垂るるは，また未だ易しと為さざるなり」と結んでいる。森三樹三郎氏はこの文を引いて，曹操の門閥本位否定，能率主義的な人材登用にもかかわらず，寒門出身者の多くが大をなさず，たいてい一代限りで終わったことを，魚豢が慨嘆したのだという[31]。寒門出身者は個人の能力によって現れたのであるから，名門の仲間入りができないかぎり，家としての存続は難しかったのである。

三国志王粲伝注の魏略には，やはり単家の出である呉質の伝を載せている。「始め質，単家為り，少くして貴戚の間に游遨す。蓋し郷里と相浮沈せざるなり。故に已に官に出ずと雖も，本国猶おこれに士名を与えず。・・・」彼も単家であるから，早く郷里を出てしまったのであるが，そこでは才能を認められて仕官がかなったのであろう。上記の例でも他郷で認められた者が多く，結局は曹操の宮廷の人才主義によって救われている。しかしそうなっても郷里では彼の地位は認められない。それをここでは「士名を与えず」と表現している。元来国家の支配者を指した「士」の語が，郷里の支配者

を指す語に転化している。中村圭爾氏はここに六朝貴族制社会の士身分と，士庶区別の淵源を認めている[32]。

私はさきに曹操の政策と関連して，後漢末以来の名士の側にも変化がみられると推測した。そのことがなければ政権と対立していた彼らが，王朝貴族となっていく過程が明らかでない。反面名士の郷里における独自の秩序は頑として存続し強化されていく。そのような六朝貴族社会の特質を中村氏はみごとに指摘しているが，私が第1章で示唆した考えによれば，それは秦漢以来の国家と地方社会との二つの秩序が到達した結果である。

曹操の後に文帝曹丕が立って九品官人法を施く。この法は政権の側の人材登用の主導権を前政権から引き継ぎながら，郷論を基礎にする点で名士社会に対応している。ただ政権中枢の実権を名士らが完全に掌握して貴族制社会が確立するまでには，なお魏代を通じての政争を経る必要があった。

註

1) 『曹操論集』(北京，三聯書店，1960年)
2) 好並隆司「曹操政権論」(『岩波講座世界歴史5古代5』，東京，1970年)
3) 好並隆司「前漢帝国の二重構造と時代規定」「前漢帝国における小農民の闘争」(同著『秦漢帝国史研究』東京，未来社，1978年)
4) 清流と大豪族とはかならずしも一致しない。渡辺義浩「党錮」(同著『後漢国家の支配と儒教』東京，雄山閣，1995年)は，清流豪族の出自を，選挙による中央進出を断たれた相対的に地位の低い豪族と解しているが，そうとしても党錮以後の時代に，清流と大豪族の融合が行われたのではないだろうか。
5) 唐長孺「東漢末期的大姓名士」(同著『魏晋南北朝史論拾遺』北京，中華書局，1983年)
6) 川勝義雄「貴族政治の成立」(同著『六朝貴族制社会の研究』東京，岩波書店，1982年)
7) 渡辺義浩，前掲論文
8) 渡辺義浩「漢魏交替期の社会」(『歴史学研究』第626号，東京，歴史学研究会，1991年)
9) 増淵龍夫「中国古代国家の構造」(『古代史講座4古代国家の構造(上)』東京，学生社，1962年)，拙稿「時代区分特輯・前言」(『古代文化』第48巻第2号，京都，古代学協会，1996年)
10) 後漢末党人の闘争が広い地域的連携をもったことはつとに指摘されているが，その後をうけた曹操集団が，前漢高祖や後漢光武の集団に比べて，超郷党的性格をもつことは，矢野主税「曹操集団の性格の一考察」(同著『門閥社会成立史』東京，国書刊行会，1976年)が指摘している。
11) 発掘された曹操宗族墓のうちの元宝坑一号墓出土の字磚に，曹氏一族の詳しい記述がある。
12) 呉玉蓮『史伝所見三国人物曹操劉備孫権之研究』(台北，文史哲出版社，1989年)9頁には，曹氏と夏侯氏との通婚と同姓不婚との関係が論じられている。そこでも示唆されているように，両者は別の氏族であるから通婚に問題はない。曹崇の養子も，両氏族の縁組の一つとみなせる。
13) 張可礼編著『三曹年譜』(済南，斉魯書社，1983年)は，何顒伝によってこれを党錮前後と推定しているが，張璠漢紀の記述をみればそれはほとんど正しい。
14) 唐長孺「九品中正制度試釈」(同著『魏晋南北朝史論叢』北京，三聯書店，1955年)
15) 川合康三『曹操』(東京，集英社，1986年)は，許劭の曹操評の記録の相違について，その間のニュアンスの違いを論じている。その点は記録者の立場・観点にさかのぼって考えれば意味をもつだろう。しかしその場合，前提にある事実がどういうものであるかを理解したうえでなければならないであろう。
16) 川勝義雄「曹操軍団の構成」(前掲『六朝貴族制社会の研究』)
17) 五井直弘「曹操政権の性格について」(『歴史学研究』第195号，1956年)。これは辟召によって曹操の臣下

が作られたとする論であるが，これにはまた好並隆司「曹操の時代」(『歴史学研究』第207号，1957年）が異論を出している。

18) 拙稿「魏晋南北朝時代の村をめぐって」(唐代史研究会編『中国の都市と農村』東京，汲古書院，1992年)

19) 川勝義雄，前掲論文

20) 川勝義雄「貴族制社会の成立」(前掲『六朝貴族制社会の研究』)

21) 丹羽兌子「荀彧の生涯――清流士大夫の生き方をめぐって―」(『名古屋大学文学部創立二十周年記念論文集』名古屋大学文学部，1969年)，同「魏晋時代の名族--荀氏の人々について―」(中国中世史研究会編『中国中世史研究』東京，東海大学出版会，1970年)

22) 唐長孺，前掲「東漢末期的大姓名士」

23) 川勝義雄，前掲「貴族政治の成立」。なお張大可『三国史研究』(蘭州，甘粛人民出版社，1988年）には，「論曹操的智囊団」なる一文がある。

24) 唐長孺，前掲論文

25) 越智重明「曹操政権と士人層」(同著『魏晋南朝の貴族制』東京，研文出版，1982年）参照。

26) これらの法令は，陳寅恪「書世説新語文学類鍾会撰四本論始畢条後」(同著『金明館叢稿初編』上海古籍出版社，1980年)，佐藤達郎「曹魏文・明帝期の政界と名族の動向」(『東洋史研究』第52巻第1号，京都，東洋史研究会，1993年) 注15等に列挙されている。陳氏は挙げていないが，先述のように，203年 (建安8年) 頃，「治平には徳行を尚び，有事には功能を賞す」の法令が出ている。

27) 唐長孺「魏晋才性論的政治意義」(前掲『魏晋南北朝史論叢』)

28) 佐藤達郎，前掲論文は，曹操の人才主義を表す法令には，名族抑圧の思想がないと指摘する。

29) 徐徳嶙『三国史講話』(1955年，香港，文昌書局影印本)，吉川忠夫「范曄と後漢末期」(同著『六朝精神史研究』京都，同朋舎出版，1984年)

30) 吉川幸次郎『三国志実録』(東京，筑摩書房，1962年，『吉川幸次郎全集』第7巻，筑摩書房，1968年)。なお曹操は，崔琰が「時か，時か，たまたままさに変事あるべし」と言ったと聞いて平民以下に落としたが，それでも彼は「賓客を通じて，門に市人のごとし」という状態があると言って死を賜った (三国志同伝)。ここでも浮華が口実になっている。

31) 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』(京都，同朋舎出版，1986年) 19頁。

32) 中村圭爾「『士庶区別』小論」(同著『六朝貴族制研究』東京，風間書房，1987年)

(ほり　としかず)